

卒業生の皆さん、保護者の皆様、本日は、鹿児島大学医学部医学科の卒業式にお越しいただき、誠にありがとうございます。

まずは、卒業生の皆さん、心からお祝い申し上げます。皆さんの努力が実を結び、今日この日を迎えることができました。

あなた方が2年生の春、新型コロナウイルス感染拡大が始まり、国民生活が大きな制限を受けました。救急車が家の近くで停まり、防護服を着た人たちが家に入っていくのを見たりすると、あの人は感染したんだ、私たちも怖い！と誰もが非常に恐れた時期もありました。私たち医師の多くは、自身が感染し、死ぬかもしれないという感情の中で、診療を続けました。医療者の中には、家族と別に生活し、病院に通勤した人も多くいました。医療人としての覚悟を試されていると、感じました。学生の臨床実習をどうするのか、実習無しに医師にさせるわけにはいかないとの思いから、ギリギリの状況まで実習を挙行了しました。保護者の中には、何故こんな時に実習させるのかというクレームも来まし、学生の中からも不安の声が聞かれました。しかしながら、もっと状況の悪いアメリカでは、2020年12月にはアメリカ全土での死亡者数が1日に3000人を超え、医学生が最前線の医療者をサポートするといった現状も生まれました。これから先、同じような新興感染症が起こった時、医師になった君たちが、どのような感情で、どう動くのか、何かと理由を着けて避けるのか、自身を奮い立たせて立ち向かうのか、じっくりと考えてみてください。

いずれにしても、未曾有の状況の中で君たちは学びを続けてきました。講義や臨床実習が制限され、オンラインでの学習が主流となる中で、多くの困難に直面したことでしょう。しかし、そのような逆境にもかかわらず、皆さんは粘り強く学び続け、医療人としての資質を磨いてきました。この経験は、皆さんが今後の医療現場で直面するであろう、様々な困難に立ち向かう力となることでしょう。

鹿児島大学の前身である、鹿児島医学校兼病院で校長を務めた、ウィリアム・ウイリス、このホールの名称でもあります。そのウイリスが、医学生の教育や診療を行う中で、鹿児島県の県令であった大山綱良に書簡を出しています。その中で、ウイリスは「医学という分野は誰でもほどほどに努力すれば習得できるという、機械的な技術ではありません。正しく優れた医学の知識とは、長年にわたる困難で苦しい努力によって、初めて習得することができるものなのです。医師の仕事は往々にして人間の生死に関わるものであり、人を助

ける作業の中で、彼らの生命は常に伝染病に感染する危険や戦闘に巻き込まれる危険にさらされています。さらに、医師という仕事は昼夜を問わず勤務を求められたりするものです。」と訴えています。彼は24歳で来日し、戊辰戦争で、敵味方なく外科医の腕を振り、31歳で現在の東京大学医学部の前身である、東京医学校兼大病院の創始者となっています。翌年、明治2年に鹿児島に赴任した時、元上司に向けて、「ヨーロッパの言語を話す人々から、私は数百マイルも離れてひとりで暮らし、そしてつい最近まで、真の日本人の第一の義務は、外国人を皆殺しにすることだと教えこまれてきた連中と、私は毎日交わらねばならないのです。」と、手紙を書いています。一人孤独で、信用できる人ばかりではない環境の中、医師として命を懸けて、医学生を指導し、常に利他的に診療を行ったその姿は、150年以上の歴史を経て、脈々と君たちに繋がっていると信じています。決して自分を犠牲にしてまで頑張れというのではなく、気持ちの底に、利他的な考えをもって行動してほしいということです。

また、世界を見渡せば、ウクライナ戦争や中国による台湾侵攻の懸念など、ナショナリズム思想が台頭し、不安定な状況が続いています。このような時代だからこそ、人と人とのコミュニケーションが一層重要となります。他人を思いやる心、共感する力が求められるのです。特に医療人として、患者さんやそのご家族、そして同僚との信頼関係を築くことが、治療の成功に繋がります。

医療は科学であると同時に、人間の営みでもあります。技術や知識だけでなく、人間としての温かさや思いやりが、患者さんにとって大きな支えとなります。皆さんがこれから医療現場で活躍する中で、常に患者さんの立場に立ち、その心に寄り添うことを忘れないください。

最後に、皆さんの未来が明るく、充実したものであることを心から願っています。どんな困難が待ち受けていようとも、皆さんなら必ず乗り越えられると信じています。これからの活躍を楽しみにしています。本日は誠にありがとうございます。

令和7年3月25日

鹿児島大学医学部長 大脇哲洋